

本解「沈清クッ」と説経「松浦長者」(下)

金 賛 會

三、沈清諸伝本と松浦諸伝本との相關関係

本解「沈清クッ」の諸伝本については別稿で詳しく論じた。そこで翰南本系『沈清傳』はより古態性を含み、その始原の説話に近接し、それは本解「沈清クッ」と深い関係にあることを確認した。また、その二伝本と説経「松浦長者」との関わりの見通しも立てた。

また、「松浦長者」の諸伝本について、松本隆信氏⁽¹⁸⁾は七本の諸伝本を紹介されており、その関係については、すでに諸氏⁽²⁰⁾によって詳しく考察が試みられているが、管見し得た本文は、(一)室町末期写本の赤木文庫蔵『さよひめのさうし』(横山重・松本隆信両氏『室町時代物語大成』第六所収)、(二)江戸初期書写の京大美学研究室蔵『さよひめ』(横山重氏『室町時代物語集』第四所収)、(三)元和刊の古活字版『ちくふしまのほんし』(横山重氏『説経正本集』第三所収)、(四)寛文二年写の奈良国立博物館蔵『坪坂縁起

繪巻』(横山重氏『説経正本集』第三所収)(四)寛文元年版の池田金太郎氏蔵『まつら長じや』(横山重氏『説経正本集』第一所収)、(四)宝永初年頃の東京芸大図書館蔵『まつら長者』(横山重氏『説経正本集』第一所収)等である。今、韓国の翰南本系『沈清傳』および本解『沈清クッ』と右に掲げた六本の松浦諸伝本のモチーフ構成を対照して示すと、およそ別表のようになる。

別表のごとく八者は、そのモチーフ構成においてきわめて近似すると言えるものである。

まず発端の部。(一)の「冒頭文」について、翰南本系は、「話説(さて)、明の成化年間、ナムクンの地に一位名士がいて、姓は沈で、名は賢であり、血筋は名門巨族で……」と始めるもので、これは『さよひめのさうし』『ちくふしまのほんし』に近似する書き出しと言えるものである。これに対して「沈清クッ」は、「このクッを何故唱えるのかと言うと、この世の人々においていちばん肝心なのは目です……」と始めるもので、ムードンが巫神の沈清・

沈盲人の由来を叙述するものである。これはたとえば、「たゞいまかたり申御はんち……」さるほどに……と始めて竹生島の弁才天の由来を叙述する『さよひめ』『松浦長者』に近似すると言えるものである。(二)の「高貴な血筋」、(三)の「申し子誕生」のモチーフは、主人公が常の人ではなく、選ばれた女性であることを主張しようとするものである。「沈清クツ」は儒・仏・仙思想の習合した申し子とするのに対して、翰南本系は夫婦が一人の子もないのを悩んでいたが、その後、妻が神夢を見て子供を授けられたとあって、申し子をする場面が語られていない。これに対して、『さよひめのさうし』は清水観音の申し子、『さよひめ』『松浦長者』は長谷観音の申し子とあって、当代の支持の強い神仏の申し子とする叙述によったものである。また、『ちくふしまのほんし』『坪坂縁起絵巻』は申し子する場面が語られていない。次の「前生譚・来歴譚」についても「沈清クツ」は、沈奉事と郭氏夫人の数々の寄進供養に対して、夢に一人の仙女が降りてきて、(私は)西王母の娘として蟠桃進上に行く道で玉真婢子にあって、言葉のやりとりをしたため、遅れてつきました。その結果、天帝はお怒りになって人界に下ることを命じました。しかし、行く先がわからなくて迷っていたところ、太上老君・諸仏菩薩・釈迦如来がお宅に行けと、指示しました。喜び迎えて下さい。とあるように、自分の来歴を言うのである。また、翰南本系はこの「申し子誕生」のところでは「前生譚」のモチーフを見せないが、沈清が竜宮へ行った時に、竜王が沈清と沈賢の前生譚を語る

のである。

あなたは前生、チョカン王(東海竜王)の貴女で、王母宴に使う酒を何かの事情で老君星にたくさん飲ませ、宴会の酒を足りなくした。(そのため)兜率天が天帝(玉皇大帝)に訴え、天帝はお怒りになって(中略)詳しく調べて重罪を科するようにした。(中略)(その罪で)老君星は沈賢となり、人界に天下りし、それから四十年後に、あなたを娘とし、(中略)十三年間、乞食をして暮すことになった。また、盲目となり(中略)天上果報を受けるように定まった。今生苦楽は、前生での因果応報によるものだ。

右のように、沈賢夫婦に子のなかった理由、盲目・乞食などのすべてが前生の因果によるものである。これに対応するモチーフが説経「松浦長者」(江戸版)に見られる。すなわち、

まづ父は、しなのゝ国のかりうど也、日やにものの命をとることむりやう也、そのうへ野山に火をかけて、天下かすみにやきはらふ、(中略)かかる所へ、しきりにほのふもへくれば、あはれなるかな母鳥は、十二のかい子をおしみつつ、ついにやけしにはてにける、(中略)若人間口口をうけば、大まん長者に生れをなし、子という子をもたずして、明くれ物思ふべしと、のろいしがつきすして、子だねはさらになきぞよ、いんぐわをうらみよ、(中略)又母の長者は、あふみの国の大じやなりしが、あまたの鳥るい、ちくるいの子を取、なしが子の、ちきもつにあたへし、いんぐわにより、子だねはさらになきぞとよ、

『ちくふしまのほんし』	『坪坂縁起絵巻』	「まつら長じゃ」(上方版)	「まつら長者」(江戸版)
主人公の父母の紹介	本地物の形式	(同左)	(同左)
○	○	○	○
		○(長谷の観音)	○(同左) ○(観音)
		○(父・病)	○(同左)
		○	○
		○(春日の明神が老僧に変化)	○(同左)
○(同左)	○(同左)	○(同左)	○(同左)
○(同左)	○(十五歳の男女のか たらいを知らぬ人)	○(夫の肌をふれぬ眉目よき姫)	○(同左)
○(同左)	(ただ買い取る)	○(五十両)	○(同左)
○(五日の日)	○(七日の暇)	○(五日目の八つの頃)	○(五日の暇)
		○(四の宮河原・逢坂で延喜帝 の皇子・蟬丸)	○(逢坂で延喜帝の皇子・蟬丸)
○(同左)	○(同左)	○(同左)	○(同左)
		○(大蛇の姫・伊勢の二見が浦 のもので、人柱にされた恨み)	
		○(母)	○(同左)
		○	○
		○	○
○(大蛇は壱坂の観音、 姫君は竹生島の弁才天 の明神)	○(姫君は弁才天女、 大蛇は壱坂の観音)	○(姫は八十五歳に大往生し、 竹生島の弁才天、大蛇は壱坂 の観音)	○(姫は竹生島の弁才天、大蛇は 竜になって天にあがる)

別 表

	段 落	『沈清傳』(輪南本系)	「沈清クッ」(本解)	『さよひめのさうし』	『さよひめ』
発	⇒〔冒頭文〕	主人公の父母の紹介	「沈清クッ」を唱える理由	主人公の父母の紹介	本地物の形式
	⇒〔高貴な血筋〕	○	○	○	○
端	⇒〔申し子誕生〕	(仙人下降の夢)	○(仏・儒・仙)	○(清水の観音)	○(長谷の観音)
	〔前生譚・来歴譚〕		○(申し子の本人)		
展 開 ①	⇒〔親の死〕	○(母・病)	○(母・産後別症)	○(父・仏罰)	○(父・病)
	⇒〔親の盲目〕	○	○		○
	⇒〔老僧の予言〕	○(老僧)			○(春日の明神が老僧に変化)
	⇒〔姫君の身売り〕	○(父の目の平癒のために)	○(同左)	○(父の命日の菩提のために)	○(父の十三年忌の菩提のために)
	〔商人の条件〕	○(女の子を高価)	○(十五歳の処女)		○(夫の肌をふれぬ眉目よき姫)
	〔身売りの代金〕	○(白米三百石・追加で白米五十石・数日の休暇)	○(白米三百石)	○(千両)	○(五十両)
	〔旅立つ日〕	○(七月の三日)	○(来月十五日)	○(七日の暇を要求したが十日をくれる)	○(今日より五日のくれほど)
	⇒〔逢坂山の蟬丸〕				○(四の宮・十禅寺・逢坂関の明神)
	⇒〔人身御供〕	○(竜王)	○(同左)	○(大蛇)	○(同左)
	⇒〔前生譚・来歴譚〕	○(東海竜王の侍女が自分の正体、竜王が沈清・沈賢の前生譚、沈清が皇帝に自分の来歴を言う)	○(東海竜王の侍女が、自分の正体、沈清が皇帝に自分の来歴を言う)	○(大蛇の姫・八郷八村の地頭の娘で親の跡を奪われた恨み)	○(大蛇の姫・伊勢の二見が浦のもので、人柱にされた恨み)
結 末	⇒〔親子再会〕	○(父)	○(同左)	○(母)	○(同左)
	⇒〔開眼〕	○	○	○	○
	⇒〔栄華・繁昌〕	○	(ムーダンの祈願)	○	○
	⇒〔神々示現〕	(北斗星は老君星が公侯となり、落花生と結婚し、男女を生み、七十五歳に元の官職にもどること、奎星が三男二女を生み、七十三歳に東海に帰ることを予言)	○(巫神・一目の神・豊漁神)	○(母は八十三歳に三河の国鳳来寺の峯の薬師、さよひめは百二十歳に竹生島の弁才天、大蛇は壺坂の観音)	○(さよひめは大和の国司と結婚して子をたくさん生む。大蛇は壺坂の観音、さよひめは竹生島の弁才天女)

とあるように、父は、信濃の国の狩人であったが、母鳥と十二の飼子を焼死させた因果、母は近江の国の大蛇であったが、たくさんの鳥類・蕃類を取った因果によって長者に生れ、子種がないとするのである。このモチーフにおいて、翰南本系と本解は、より説経「松浦長者」（江戸版）に近似すると言えよう。しかし、三者は、その趣向においては相当の隔りがある。すなわち、韓国のものはきわめて道教色の強いものと言えらるものであり、本解は申し子が自分の来歴を、翰南本系は竜王が沈清・沈賢の前身譚を語るもので、観音が長者夫婦の前身譚を語る説経との異同は否めないものである。

次は展開①の部。(一)の「親の死」について、翰南本系は、母が姫の三歳の時に、にわかに病を得て、本解は、母が沈清を生んで産後別症という病でなくなるとある。これに対応するモチーフが『さよひめのさうし』には、姫君の七歳の時に、仏に悪口をした仏罰、『さよひめ』と「松浦長者」には、姫君の四歳の時に「風の心ち」・「風の病」を得て、父がなくなるとある。このモチーフにおいては、本解よりは翰南本系の方が『さよひめ』と「松浦長者」に近似しているように思われる。(二)の「親の盲目」についても、翰南本系は、妻の死後、父の沈賢は深く悲しみ、ついに家はおちぶれ、眼病にかかって盲人となり、本解は、家がおちぶれ、幼きより盲人となった。これに対応するモチーフが『さよひめ』には、「心きやうらんし、よるひるとなく、なきさけひ、りやうかんを、なきつぶし」とあり、上方版の「松浦長者」には、「あ

らさよひめこひしやと、ついに両がんなきつぶし」、江戸版の「松浦長者」には、「やかたの内に、たまらずして、くるひ出させ給ひつゝ、両がんなきつぶし」とあるように、母は娘を売られた悲しみで目をなきつぶすのである。このモチーフにおいても本解よりは翰南本系の方が『さよひめ』と「松浦長者」に近似していると言わねばならない。また、この盲目のモチーフは、韓国の翰南本系および「沈清クッ」が『さよひめ』「松浦長者」とその始原を一にすることの想定に重要な意義を有するものと言える。(三)の「老僧の予言」については、翰南本系「沈清傳」は、沈清が死ぬ覚悟で父の目の平癒を夜通し祈願し、居眠りすると、一人の老僧が現れ、

明日、あなたを買いいたいという人が現れるだろう。その時、あなたはもし、それが死ぬ所であるとしても心配しないで下さい。あなたの親孝行を天が感動し、自然にいいことがあるだろうと言つて、かき消すようになくなった。

とあるように、人買人が来ること、沈清の未来のことを予言している。これに対応するモチーフが「松浦長者」と『さよひめ』に見られるが、上方版の「松浦長者」を代表させ、その本文を掲げると、

かゝりける所に明神は、是をふびんと思召、八十ばかりのらうそうと身をへんげいかに太夫殿、是よりあなたに、松たにといふ所に、まつら長じやと申てうとく成人有りしか（中略）此人のうらせ給ふ事も有べし、太夫殿との給ひて、けすかやうにう

せ給ふ

とあるように、春日明神が老僧に変化、さよひめの所在を教えてやるのである。勿論、後者は、その老僧が春日明神とあって、それを言わぬ前者と信仰圏の相違が見られる。また、前者は老僧が沈清を不憫に思つて、その夢に示現する相違が見られる。しかし、日本の伝本でも明神が姫君を不憫に思う叙述をまったくみせないわけではない。たとえば、阪口弘之氏⁽²⁾によつて翻刻・紹介された『まつうらさよひめ』には、「ありかたやかすかのみやうしんは、さよひめのかうくをあはれみおほしければ、八十はかりのおきなど、御身をへんし」とあって、「松浦長者」とやや違った叙述をみせている。このモチーフにおいても、翰南本系はより「松浦長者」と『さよひめ』に近接していると言える。四の「姫君の身売り」についても、両者は信仰圏の相違によつて、韓国のものは、父の目の平癒のために、日本のそれは、父の十三年忌の菩提（『さよひめ』は父の命日の菩提）を弔うためという相違はあるが、いずれにしても父のための身売りである共通点を持つ。また、姫君を買う「商人の条件」についても、『さよひめのさうし』は、そのモチーフを欠落しているが、他の諸伝本はともに共有するものと言える。また、姫君の「身売りの代金」については、翰南本系と本解はともに白米三百石とする点では一致を見せているが、前者には、沈清の親孝行に感動した商人らが追加で白米五十石を与えたとある。これに対応するものが『さよひめのさうし』には千両、「壺坂物語」には十両、『さよひめ』『ちくふしまのほんし』

『松浦長者』には五十両とあって、本解よりは翰南本系の方がやや日本のものに近似しているように思われる。また、松浦諸伝本は身売りの代金をもらつた姫君は、父の菩提を弔う暇を要求するが、『さよひめのさうし』には七日（太夫は十日の暇をくれる）、『坪坂縁起絵巻』にも七日、『さよひめ』『ちくふしまのほんし』『松浦長者』には五日とある。が、沈清諸伝本は、日本のもののように積極的姿勢はみせず、むしろ沈清が、商人に自分のつれて行く日を聞く叙述となつていて、やはり異同は否めない。ただし、「沈清クツ」の諸伝本にあつてもこの叙述をまったくみせないわけではない。たとえば、松浦諸伝本と時点は異つているが、沈清が家を出る当日に、翰南本系は父と交わせなかつた話をする暇として一日を、パンソリは父と別れの挨拶をする暇、その他の伝本は父に御飯を炊いてあげる暇を要求している。この相違は両民族の民族性・文化の相違によつて生じたものであろう。姫君の「旅立つ日」についても、翰南本系には七月三日、本解には来月十五日、『さよひめ』には今日より五日のくれほど、『ちくふしまのほんし』には五日の日、上方版の「松浦長者」には五日目の八つの頃とあるのに対して、江戸版の「松浦長者」「坪坂縁起絵巻」は太夫はそれぞれ五日の暇・七日の暇を与えたただで、出発の日がはっきりされていない。四の「逢坂山の蟬丸」については、上方版の「松浦長者」には、「山しなに聞へたる、しの宮かはらを、たとくといそかるゝ、行きも帰るもあふさかの、此明神のいにしへは、あんぎの御門の御子にせみ丸とのにて、御さ有よ

しを承、りやうがんあしきゆへにすて有、せきの明神とはやらせ給」とあり、江戸版の「松浦長者」には、「ゆくも帰るもあふ坂の、此明神のいにしへは、あんぎのみかどの御子に、せみ丸どのにてをわしますよし、承て候也、兩かんあしきゆへにより、此所にすてられて、せきの明神と、はやらせ給ふ有がたや」とある。また『さよひめ』には、「あさかけくらき、やましなや、四のみや、十せんし、せきのみやう神、ふしおかみ、いきてわかれしあふさかと、いのりつつ」とあるように、奈良・松谷を出発した姫君と太夫は、般若寺（江戸版の「松浦長者」）、祇園林・清水寺で旅の安全を祈願し（「松浦長者」）、山科・四の宮河原（上方版の「松浦長者」『さよひめ』）を経て、逢坂で延喜帝の第四の皇子・蟬丸（『さよひめ』は逢坂の関の明神）を伏し拜んで、大津打出の浜へ下ってゆくのである。これはすでに指摘されるように、般若寺は奈良坂にあつて、非人の拠点となつていた所であり、清水寺は清水坂の本寺で、のちに清水坂非人は祇園の大神人に分化している。また、四の宮河原や十禅寺は説経の徒が祖神とする蟬丸ゆかりの地で、特に十禅寺は、人康親王が隠棲し死後祀られたとの伝承のある寺である。福田晃氏は、「かの当道派の琵琶法師たちが四宮河原に祀る祖神・人康親王は、仁明天皇の第四の王子であつた。四宮河原の延喜の第四の王子・蟬丸をあげる『平家物語』（巻十の海道下り）の叙述は、少なくともこれを語る琵琶法師たちには誤りではなかつた」とされ、蟬丸説話は、逢坂山から四宮河原に及ぶ一つの伝承圏にあつたことを指摘されている。また、

奈良から京都を経て近江に至る道程は、『さよひめ』より「松浦長者」の方がもっと詳しく語られている。これはおそらく、この物語を管理・伝承してきた信仰集団の相違によるものであろう。たとえば、『さよひめのさうし』は姫君を清水観音の申し子とながらも、奈良から京都までの間の道程は、まったく語られていない。これに対して、説経「松浦長者」は清水寺へ立ちよる叙述となつていて、発端の（三）「申し子誕生」、展開①の（一）「親の盲目」、四の「姫君の身売り」とかわつて、藤原氏と関係が深い長谷観音、春日大社、壺坂寺などとともに、その説かれることの意義が問われねばならない。ちなみに、近世の説経の徒が彼らの祖神とする近松寺の蟬丸宮から免許を得ていたこと、また、盲目の職掌を受けついだのが説経の徒であるとするは、この「逢坂山の蟬丸」のモチーフは、当物語の始原を想定するのに大事な意義を有するものであると言わねばならないであろう。

次は展開②の部。（一）の「人身御供」については、沈清諸伝本は印塘水という海の竜王、『さよひめのさうし』はうるまかいけの大蛇、『ちくふしまのほんし』『坪坂縁起絵巻』、上方版の「松浦長者」は山の奥の大きな池の大蛇、江戸版の「松浦長者」はさくらが淵の大蛇の生贄に供えられる。しかし、沈清諸伝本と松浦諸伝本は、それぞれの信仰集団によつて、その趣向においては相当の隔りがあるが、日本の伝本においても竜のモチーフをまったくみせないわけではない。たとえば、大蛇は成仏に感謝して姫君に竜宮世界にある如意宝珠を与えた（「松浦長者」『さよひめ』）と

あり、「松浦長者」には、「ひめ君をたつがしらに打のせて、いけのそこへ、入かとみへしか」「それよりも大じやは、りやうたつとなつて、天へあがらせ給ひける」とあつて、大蛇が竜に変じて叙述される不自然さをみせている。勿論、これは「このだいはんと申せしは八さいのりう女、そくしんじやうぶつ」とあるように、法華経と竜との関係によるものであることは疑いないであらう。(一)の「前生譚・来歴譚」についても、翰南本系は、セアン髪（女の子が礼装の時、髪を両方に分けて、編んで垂らすか大きく曲げて結んだ髪）の仙女が沈清を船に乗せ、蘇生の薬を飲ませて、自分の正体を明かして、竜宮へつれて行くのに対して、他の諸伝本は八仙女が御輿（橋子）に乗せて竜宮へつれて行く叙述になつていて、翰南本系の趣向をより複雑に展開させている。また、全諸本とも沈清が花の蕾から人間に変身する時と、皇后になつた時に自分の来歴を皇帝に語る場面がある。

私の身分は竜宮のものでございせん。実は黄州桃花洞に住む沈鶴圭というものの娘でございます。父は盲目でありまして、それを私は一生の恨みとし、何とかして目をあげたいと思つて、米三百石に身を売つて印塘水に入つたのですが、とあるように、父の盲目のことが一生の恨みで、印塘水に身を投げたのである。また、前述したように、翰南本系では沈清が竜宮へ行った時に竜王が沈清・沈賢の前生譚を語るところがある。これに対応するものが上方版の「松浦長者」では、国を申せはいせのくに、ふたみがうらの物なるがけいぼのは、

にくまれて、行ふもしらずまよひいで、人あき人にたばかり、かなたこなたとうられきて、（中略）はしをかけんとて、（中略）人おゝきその中に、みつからをしむ物ならば、たけ十ぢやうの大じやとなりて、この川のぬしと也、

とあるように、大蛇の姫は、人柱にされた恨みで大蛇となつたといふのである。『さよひめ』の場合も、上方版の「松浦長者」とほぼ同じ叙述を見せているが、『さよひめのさうし』の場合は、八郷八村の地頭の娘で親の跡を人に奪われた恨とあつて、右の二伝本と違つた叙述をみせている。日本の場合は生贄譚の中に生贄譚を内包した趣向をみせているが、韓国の伝本においてもこういう叙述をまつたくみせないわけではない。たとえば、翰南本系以外の諸伝本には、沈清が船で印塘水を往来する時にいろいろな靈魂にあつて、沈清はそれを自分への祟りと思う趣向にその展開の相がひそかにうかがわれるものであつた。しかし、日本の伝本はその怨念が姫君の誦んだ法華経の功力によつて鎮められ、それにとどまらず、ついには壺坂の観音と現れるもので、韓国の伝本とずいぶん違つた展開をみせている。それでも両者のモチーフの一致は否めない。

次は結末の部。(一)の「親子再会」については、韓国の沈清諸伝本は、沈清は乞食・鬼神同様の父と再会し、『さよひめ』は「は、うへは、京わらんへのくちく」に、まつら物くるひと、なつてなつて、こなたへきたれ、あなたへ参れ」とあるように、さよひめは盲目・物狂いとなつて、袖乞いをしている母と再会している。

「松浦長者」は『さよひめ』とほぼ同じ叙述内容であるが、『さよひめのさうし』にはこの部分が見あたらない。しかし、韓国のものは皇后となった沈清が盲人宴会を開いて、父と再会するもので、その趣向においては、日本のものとずいぶん違った展開をみせている。この盲目・乞食の宴会のモチーフは他の本解⁽²⁶⁾にも見えており、沈清諸伝本はそのモチーフを導入したものである。また、翰南本系以外のテキストは、盲人宴会へ行く沈盲人の道行が滑稽に長文にわたって語られているのに対して、翰南本系は、この部分を欠落している。このモチーフにおいても翰南本系は『さよひめ』『松浦長者』に近似していると言えよう。(二)の「開眼」についても、翰南本系は、「私が目がなくてお前を見ることができない。こんな罪悪のこともあるのか」と言って、父の沈賢が目を一度しわめるとたちまち開き、その後、親子がともに抱きつき、涕泣したとあり、申在孝本・パソソリには、沈清が玉手で父の顔を撫でさすると目が開き、同時にあらゆる盲人の目も開いたとある。また、唱楽大綱「沈清歌」には、沈清が竜宮から持ってきた薬を父の目に入れて開いたとある。これに対して本解は、天界で玉真夫人（沈清の亡母）の送った鶴が降りてきて、目を何度も撫でさすると、父の目がたちまち開き、また別本では、天界で玉真夫人の送った鶴が薬水を落とすとたちまち目が開いたとある。しかし、「沈清クツ」以外のテキストは、沈清の親孝行に興味の中心をおいて、主人公のめでたき栄華をもって大団円となしているのに対して、「沈清クツ」はこの「開眼」の部分で話を終息させ、開眼

にその中心を置き、次の四「神々示現」とかわわって主人公たちの神示現を主張し、本解としての性格を保有することとなっていると言える。一方、『さよひめのさうし』には、さよひめが袂より「九ちやうほうしやう」の玉を取り出して、母の両眼を撫でるとたちまち開いたとあり、『さよひめ』には大蛇が与えた如意宝珠を取り出し、母の両眼に押しあてるとたちまち開いたとある。また、上方版の「松浦長者」には、さよひめが大蛇からもらった玉を取り出して、母の両眼に押しあて、「ぜんざいなれや、あきらかに、へいゆふなれ」と、二・三度撫でると、母の両眼がたちまち開いたとあり、江戸版の「松浦長者」には、「大じやのひめの、ゑさせたる、によりほうし玉をもつて、母の両がんなで給へば、たへてひさしき兩がん、あきらかにこそなり給ふ」とある。また、『ちくふしまのほんし』『坪坂縁起絵巻』は、この盲目・開眼のモチーフを欠落している。しかし、『さよひめのさうし』は、展開①の(二)「親の盲目」では、そのモチーフを欠落しているが、この「開眼」のところでは、そのモチーフを持ち込んで、やや不自然な叙述をみせている。また、江戸版の「松浦長者」は、母の開眼の後、「おや子の人々、なのめならずにおぼしめし、わがやにかへり、みだいちやうじやとあふがれて」と、その叙述を簡略化し、主人公・さよひめの神仏示現を主張している。これに対して、『さよひめ』と上方版の「松浦長者」は、主人公たちの家の繁昌・神仏示現の後に竹生島の由来などの趣向を添えている。このモチーフにおいては本解「沈清クツ」は江戸版の「松浦長者」

に近似しているように思われる。ここに至っては、韓国の翰南本系および本解と『さよひめ』『松浦長者』は、その始原を一にするということは否めないように思われる。(三)の「榮華・繁昌」についても、翰南本系（翰南本・大英A本・大英B本）には、「親子再会」・「開眼」の後に、父の沈賢は国舅（皇帝の舅）となり、

皇帝の仲立ちで左丞相の娘と再婚したとある。しかし、翰南本系の大英B本だけは、この話の後に国舅となった父の沈賢が故郷に帰り、昔、世話になった村人らを招き、宴会を開き、数々の財物を与えたこと、昔の家を改築して数十人の家来にそれを守らせたことなど詳しく叙述されている。一方、『さよひめのさうし』には故郷に帰ったさよひめはその後、父の長者のように榮え、大蛇の姫と三人で一つの所で住んだとあり、また、『さよひめ』は如意宝珠の力によって「なさけありし人々や、又いにしへの、下人けらいの、ものともに、かすのたからを、たまはりて、いにしへの、ふりにしあとに、やかたをたて」て昔のように榮えたこと、その後、さよひめは大和の国司と最愛して、子供がたくさんできたことなど、他の伝本よりは叙述が詳しい。また、上方版の「松浦長者」は、『さよひめ』とはほぼ同じ趣向をみせながら、奥州から太夫夫婦を呼んで、数々の宝を与え、家臣として頼み、ふたたび松浦長者の跡を継がせたとある。このモチーフにおいても、翰南本系は『さよひめ』『松浦長者』に近似していると言えるが、特に大英B本が『さよひめ』と上方版の「松浦長者」に近似しているように思われる。(四)の「神々示現」については、翰南本系は、

最後に沈清および沈賢が神に現れたという叙述はみせないが、沈賢が竜宮へ行った時に、竜王が沈清・沈賢の前生譚をするところからその展開の相がうかがわれる。

南斗星が（天帝に）申すには、奎星は本来、東海竜王の娘で、人界に天下り、世にまれな親孝行をしています。（ですから）民家の家母にはなれないので瑠璃国の皇后となり、平生福樂を享受するようにすべきです。天帝はそれを許した。また、北斗星が天帝に申すには、（中略）老君星は公侯となり、遅く落火星に会い、男女を生み、平生、富貴功名を享受させ、七十五歳にもとの官職にもどるようにし、（また）奎星は、三男二女を生み、七十三歳にもとの東海に帰るようになります。

とあるように、北斗星が老君星（父の沈賢）は七十五歳にもとの官職（天界）に、奎星（沈清）は七十三歳にもとの東海竜宮にもどることを予言しているのである。また、本解は、沈清および父の沈盲人はともども巫神に祀られる

○沈清クツを何故唱えるのかと言うと、この世の人々にいちばん肝心なのは目です。意外のことで丈夫な目を失う場合もあります。眼病も防いで下さって、雑病も防いで下さい。悪い泥坊（悪疾）の目もすべてなおして下さい。この海岸に住んでいるため、家々の子孫たちが広々とした青海原に出るにしても、いちばん肝心なのは、前をよく見ることです。前をよく見れば何の事故も起らないのです。よい目を下さるように沈奉事（沈盲人）を祀ります。

(辺蓮湖氏口誦本)⁽²⁷⁾

○なぜ沈清の霊をと見えるのかと言うと、(中略)人の目というのは月日のようです。(中略)私の船と他の船、すべての船が広々とした青海原に出るにしても、先ずは目がよければ前がよく見えます。(中略)東西南北から強風が吹いてきても、目がよければ、前をよく見ることができ、また、魚のいる所も知ることができます。船頭も荒い波が打っても目がよければ事故がなく、(中略)沈奉事(沈盲人)の霊を真心を尽して唱えようと、この村は安泰で、雑病も防いで下さって目もよくなります。

(金福順氏口誦本)⁽²⁸⁾

○沈清クツを何故また、唱えるのかと言うと、われわれが暮してゆくこの世ははかないものです。天地の大福は何か。農業も大福で、子供も大福ですが、天界の月日のように肝心な宝物は目です。沈清の霊を真心を尽して唱えと、(中略)眼病も雑病もなくして下さいます。

(李琴玉氏口誦本)⁽²⁹⁾

右のように、沈清・沈盲人は目の神に祀られているのである。これに対応するものが、『さよひめのさうし』には、「はゝの、長しや、そのうち、八十三と申に、みかわのくにほうらいちの、みねのやくしと、あらはれ給い…さよひめは、百廿と申には、あふみのくに、ちくふしまのべぎひてんと、いわゝれ給ひ、…大しやのひめは、やまとのくに、つはさかと、申ところにくわんおんと、あらわれ給ふ」とある。また『さよひめ』には、大蛇は壺坂観音、

さよひめは大和の国司と結婚して、子供がたくさんでき、近江の国・竹生島の弁才天女と現れたとある。また『ちくふしまのほんし』には、大蛇は壺坂の観音、姫君は弁才天の明神、『壺坂縁起繪巻』は、姫君は弁才天女、大蛇は壺坂の観音となったとある。

また、上方版の「松浦長者」には、大蛇は壺坂の観音、さよひめは八十五歳に大往生して近江の国竹生島の弁才天と現れたとあり、江戸版の「松浦長者」には、大蛇はそのまま天に上がった、さよひめは竹生島の弁才天に示現したとある。福田晃氏は、盲人に属する語り物の例として、中世小説「さよひめの草子」・同材のお国浄瑠璃などはこれに類するもので、お国浄瑠璃以前から盲人に属する語り物なる語り口を諸所に見せしていると論じられている。また弁才天と盲人説話との関係については、荒木繁氏⁽³¹⁾、成田守氏⁽³²⁾、本田典子氏⁽³³⁾などの指摘がある。特に本田典子氏は、「松浦長者」は、水神信仰が物語の全体を支える柱のひとつであることは言うまでもない。竹生島弁才天に眼病治療譚があるのは、実は、さよひめ説話の全体の本質に関わる問題であると論じられている。勿論、沈清諸伝本と松浦諸伝本は、それぞれの信仰集団の相違によって、その趣向においては相当の隔りがある。たとえば、韓国の翰南本系は、きわめて道教色、儒教色の強いもので、特に翰南本はその最末尾を「(皇后となった沈清が父を)朝夕で奉養できないことを歎いている」と終結させ、主人公・沈清の親孝行にその興味の中心が据えられていると言える。また、翰南本系は、結末の四「神々示現」というモチーフを、(三)の「栄華・繁昌」に転換させ、

その宗教性を稀薄にさせながら、主人公たちのめでたき栄華の物語を志向したものとされている。これに対して、本解「沈清クッ」は、(二)の「開眼」のところで、その話を終息させ、親の開眼にその叙述の中心を置いて、沈清・沈盲人の前生譚を志向し、その主人公たちの目の神示現の必要性を強調しながら、さらに韓国の東海岸地方（日本海側）の信仰圏を強く主張したものと見えよう。一方、『さよひめ』および「松浦長者」は、かつてはもともと重視された展開①の(二)「親の盲目」・結末の(二)「開眼」のようなモチーフを、展開①の(四)「姫君の身売り」・結末の(四)「神々示現」などの部分でやや後退させ、法華経の奇瑞を中心として、主人公たちの神仏示現を強く主張したものと見える。そして、『さよひめ』と上方版の「松浦長者」の場合は、最末尾に島の由来などのモチーフを添えて、竹生島の弁才天の加護を強調して、その信仰圏を強く主張しながら、竹生島に対する庶民信仰を十分に利用した物語と言えよう。

おわりに

本稿は、韓国の沈清諸伝本と松浦諸伝本が両国の民族・文化・信仰圏の相違によって、それぞれの物語の趣向を添えて異った作品を構築しながらも、その始原においては一致するものであるらしいことを検討したのであった。つまり、韓国の翰南本系『沈清傳』はより古態性を含み、その始原の説話に近接し、その原拠が古い本解にあったことが想定される。そしてそれは、そのモチーフ

本解「沈清クッ」と説経「松浦長者」(三)

フ構成において、『さよひめ』および説経「松浦長者」にきわめて近似しているように思われる。また、本解「沈清クッ」の場合、沈清の一生が父の目の平癒のために語られる。さらに沈清および沈盲人はともども巫神（目の神）に祀られる。これと関連づけて考えてみると、日本の諸伝本の中で、目の問題について、いちばんこだわっているテキストは、『さよひめ』および説経「松浦長者」のように思われる。

さて次は、沈清諸伝本と松浦諸伝本のそれぞれの生成に関与した信仰集団を明らかにする段階であるが、これについては別の機会に譲ることにした。

(18) 拙稿「本解「沈清クッ」考——説経「松浦長者」とかかわって——」『説話・伝承学』創刊号、平五。

(19) 松本隆信氏「室町時代物語類現存本簡明目録」。

(20) 佐藤りつ氏『壺坂の草子』諸本の考察（『文学論叢』昭四十二）、中田光美氏「さよひめ諸本の伝承」（『伝承文学研究』昭四十八）、荒木繁氏「説経節の語り物の形成過程をめぐる一問題」（『日本文学』昭四十八・十二）、松本隆信氏「本地物と丹緑本——『竹生島の本地』に関連して——」（『日本古典文学会々報』五号 昭四十八）、佐々木孝二氏「唱導の文学とお伽草子——女性のトキ・カタリを中心に——」（『旭川工業高等専門学校研究報文』第十六 昭五十四）、米井力也氏「大蛇の変身——『富士の人穴草子』と『小夜姫の草子』の接点——」（『国語国文』五八四号 昭五十八）、阿部幹男氏「奥浄瑠璃本『近江国竹生島辯才天の由来（掃もん長者）』——翻刻と解題——」（『松翠』第二号 昭五十九、諏訪春雄氏

「近世悲劇の胎生」(『近世戯曲史序説』昭六十二)、阿部好臣氏「女の語りの一側面——説経『松浦長者』を軸に——」(『日本文学』三十六・一 昭六十二)など。

(21) 阪口弘之氏「東洋文庫本『まつらさよひめ』(紹介と翻刻)」(『人文研究』三十四)。

(22) 本田典子氏「説経『松浦長者』の構図」(『都大論究』二十四 昭六十二)。

(23) 福田晃氏 右掲(13) 同書。

(24) これについては、室木弥太郎・阪口弘之両氏『関蟬丸神社文書』(昭六十二)参照。また、蟬丸信仰及びその芸能形態については土井順一氏「説教者の蟬丸信仰とその芸能形態とに関する一考察」(『国文学論叢』第二十輯の論考がある)。

(25) 福田晃氏「『小栗』語りの発生」(『中世語り物文芸——その系譜と展開——』昭五十六)参照。

(26) たとえば、濟州島の「三公本解」、また、咸興地域の「マンムック」の中で唱えられる「クンサンイック」など。

(27) 金泰坤氏 右掲(7) 同書所収。

(28) 徐大錫・崔正如氏 右掲(8) 同書所収。

(29) 李慶馥氏「沈清クツ研究」(ソウル明知大学大学院碩士学位論文 昭五〇)所収。

(30) 福田晃氏「民間伝承と平家物語」(民俗・民芸双書六十六『軍記物語と民間伝承』昭四十七)

(31) 荒木繁氏 右掲(20) 同論文。

(32) 成田守氏 右掲(9) 同書。

(33) 本田典子氏 右掲(22) 同書。

〔付記〕本稿は、平成四年四月二十八日、大谷大学で開催された説話・伝承学会春季大会における口頭発表の草稿の一部をまとめたものである。本稿をなすにあたり福田晃先生からいろいろ御指導・御援助を賜わった。また、山下宏明先生を始め、諸先生方に席上貴重な御教示を賜わった。また、韓国の殷東基・蔡楨株・金均泰・姜民基(韓国精神文化研究院)先生には貴重な御資料を提供いただいた。記して感謝申し上げます。

(キム・チャンフエ 本学大学院博士課程)